

石水院

石水院は、開祖明恵(1173~1232 年)の時代から高山寺に残る唯一の建物である。その平屋の入母屋造は鎌倉時代(1185~1333 年)の建築の代表的なものである。現在、石水院は寺院の活動の中心であり、最も有名な芸術作品が多く収蔵されている。

西口の近くには、菩薩である善財童子(サンスクリット語：Sudhana)の小さな木像がある。明恵は、善財童子の悟りをひらくまでの旅の物語を愛した。この像は明恵が自身の住まいに置いていたとされる像を再現したものである。

石水院の南には、高山寺の名称の由来となった花胎蔵經の一節を含む、寺院の創建を命じた勅額が掲げられている。南側の向山と清滝川の眺めは、木製の柱と格子状の雨戸で縁取られている。

石水院はもともと經文を保管するために造られたもので、高山寺の本堂・金堂の東に位置していた。1228 年の洪水で当初の建物は破壊されたが、かつて朝廷の敷地内にあった住居を使って後に再建された。再建後の石水院には、明恵にとって特に重要な神道の神であった春日大明神・住吉明神が祀られた。当時、神道と仏教は緩やかに統合されており、神道の神々は仏教の神々の化身として解釈されることが多かった。

1889 年に石水院は現在の場所に移築された。